

産褥期の腰部痛・恥骨部痛・臀部周囲痛に対するテーピングの有用性に関する検討

真田産婦人科麻酔科クリニック

○神田 恵子 平木 貴子 地村 美穂子 平川 万紀子 平川 俊夫

福岡女学院看護大学 福澤 雪子

【目的】

妊娠・出産後に出現する腰部痛・恥骨部痛・臀部周囲痛は ADL の低下や痛みに伴う育児行動の獲得の遅れなどの一因となるため、早期に対処する必要がある。当院では、骨盤輪を支持する従来の方法だけでは疼痛緩和が図れない場合があった。そのため、現在伸縮テープを用いた疼痛ケアに取り組んでおり、その有用性について検討したので報告する。

【研究方法】

研究対象は、平成 28 年 1 月～平成 30 年 1 月までに当院で出産した褥婦 1771 名のうち、入院期間中に腰部痛・恥骨部痛・臀部周囲痛を訴えテーピングを実施した褥婦 127 名(7.1%)。テーピングは疼痛に関連する筋肉に対して、起始部と停止部を結ぶようにして貼付した。実施前と実施直後の疼痛評価にはビジュアルアナログスケール (Visual Analogue Scale : VAS)を用いた。

【結果】

疼痛の訴えは、腰部痛 86 名(67.7%)、恥骨部痛 22 名(17.3%)、臀部周囲痛 19 名(15.0%)の順に多かった。127 名の VAS 得点は、テーピング実施前 69 点±22 点、実施後 29 点±19 点であった。実施前後で比較すると 4 割に低下し、対応のある t 検定で有意差がみられた ($p<0.001$)。3 つの疼痛部位別にテーピング実施前後の VAS 得点を対応のある t 検定で解析した結果、実施後得点は全ての疼痛部位で顕著に低下し、有意差がみられた ($p<0.001$)。テーピング実施後の疼痛の推移は、127 名のうち 53.5%は疼痛が緩和し、20.5%は疼痛が持続していた。テーピング実施後に皮膚トラブルやテープの不快感などの理由でテーピングを中止した事例もあった。

【考察】

テーピングの実施前後で軽減効果が得られた。その結果、歩きやすくなった、寝返りがうちやすいなどの声が聞かれ、ADL が改善したことにより早期の育児行動の獲得への手助けとなったと考えられる。テーピングは、比較的安価で一次施設でも実施できる簡便な方法であり、テーピングに関する知識や技術は、産褥期の腰部痛などの不快症状を緩和する看護として必要と考えられる。今後の課題として同一尺度で疼痛の推移を継続的に測定し、より客観的なデータの蓄積を行い、テーピングと褥婦の ADL の改善との関連を検討する。

【結論】

テーピングは、産褥期の腰部痛・恥骨部痛・臀部周囲痛の軽減に有用なケアとして、今後の効果が期待できる。